名簿No. 1

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

平仄式	平起式
作詩日	平成二八年十月二九日
名前	牛山　知彦

詩題	起句	承句	転句	結句
祝蘭香先生卒壽	壽 ●	福 ●	祝 ●	百 ●
	山 ○	海 ●	賀 ●	花 ○
	永 ●	洋 ○	九 ●	繚 ●
	永 ●	洋 ○	旬 ○	亂 ●
	白 ●	青 ○	門 ○	尚 ●
（陽韻）	雲 ○	波 ●	下 ●	蘭 ○
	翔 ◎	煌 ◎	集 ●	香 ◎

読み下し文

蘭香先生の卒寿を祝う

寿山永々　白雲翔る

福海洋々　青波煌く

九旬を祝賀し　門下集う

百花繚乱　尚蘭の香り

語註・典故・作詩メモ

永々…ながく続いて絶えないさま。
洋々…行き渡り満ち溢れているさま。
九旬…九十年。
百花繚乱…いろいろの花が咲き乱れること。転じて、秀でた人物が多く出て、優れた業績が現れること。

その他のメモ

五〇年以上、書道を習ってきた師匠が卒寿を迎える。年明けには、多くの門下生が集まって祝賀会を開く予定である。
弟子たちは幼児から九十過ぎまで多彩だが、先生も未だ元気に稽古に励んでおられる。

名簿No. 2

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
平起式 清観亭観月（庚韻）	瑤○	啾○	遮○	詠●
	莊○	唧●	莫●	吟○
	満●	團○	月●	一●
	地●	欒○	無○	夕●
	已●	夜●	三○	故●
	秋○	気●	五●	園○
	聲◎	清◎	宴●	情◎

作詩日　平成二十七年九月

名前　宇野次郎

読み下し文

瑤莊の満地　已に秋声
啾唧たる団欒に　夜気清し
さもあらばあれ　月無き三五の宴
詠吟の一夕　故園の情

メモ　詩作・故典・語註

九月十五日　小田原　清閑亭　で月見の会があった。
旧主　黒田長成侯爵　の漢詩十一作を始め　計二十七作の
伴奏つきの吟詠　があり陶然として時間を楽しんだ。
残念ながら月は見えなかった。
瑤莊ーたまのように美しい別荘
啾唧ーがやがやいう
遮莫ーままよやむをえない

その他のメモ

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

名簿 No. 3

詩題	起句	承句	転句	結句
讃微生物千酪研究者岩崎慎二郎（真韻）	求○	老◎	忽○	誕◎
	捜○	瘦◎	見◎	生○
	酵◎	惜○	球◎	千○
	菌◎	時○	糸◎	酪◎
	日◎	竟◎	凝○	越◎
	辛○	気◎	乳◎	國○
	辛○	新○	力◎	巡○

作詩日　平成28年11月7日

名前　梅村　郁郎

文　し　下　み　読

微生物チーズ研究者岩崎慎二郎を讃える

捜し求めて酵菌を日辛辛なれど

老痩時を惜みて竟気新たなり

忽ち見る球糸凝乳の力

誕生せる千酪国を越えて巡る

語註・典故・作詩メモ

・酵菌…酵素菌

・球糸…酵素菌の胞子

・千酪…チーズ

その他のメモ

微生物千酪（チーズ）

従来チーズは子ウシの第四胃袋から得られる酵素を使って作られる。それに対して微生物の中に乳凝固酵素を求め成功して作られたチーズである。

名簿No. 4

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
初冬禪寺	山 ●	秋 ○	颯 ●	晩 ○
	門 ○	去 ●	颯 ●	鐘 ○
	老 ●	閑 ○	寒 ○	清 ●
	樹 ●	庭 ○	風 ○	梵 ●
	帯 ●	橘 ●	吹 ○	古 ●
（陽韻）	斜 ○	柚 ●	落 ●	禪 ○
	陽 ◎	香 ◎	葉 ●	堂 ◎

語註・典故・作詩メモ

S

読み下し文
初冬の禪寺
山門の老樹　斜陽を帯び
秋去る閑庭　橘柚香し
颯颯たる寒風　落葉を吹き
晩鐘　清梵　古禪堂

平仄式	平起式
作詩日	二八・十・十二
名前	岡嶋　宣昭

No 11

仄起式 【尤】韻 名前 中賀康隆

題 詣相州日向薬師

起	承	転	結
△○△	△○△	△●△	△○△
●●●	○○○	○●○	●●●
○☆○	△●△	△●△	●☆●
○○○	●●●	●●●	○○○
●☆●	●●●	●○○	○☆○
●●●	○○○	○○○	●●●
○◎○	○◎○	●●●	○◎○

山気遮る遮っ寺の秋
鬱彩梢宙と葉、鳥声幽なり
詣で来たる薬王屋の医王仏
雲散霧消す胸裡の愁い

読み下し文

相州日向薬師を詣ず

医王仏ここ薬師如来の別名
日向薬師……伊勢原市日向にある直言寺の古刹、日本三大薬師の一
本尊薬師如来の他重文の仏像多し、

名簿No. 14

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
消夏戯	夏●	蒸○	庭○	徒○
	深○	暑●	上●	揮○
	流●	方○	緑●	團○
	金●	如○	樹○	扇●
	火●	堕●	陰○	負●
（東韻）	雲○	甑●	僅●	風○
	空◎	中◎	少●	翁◎

語註・典故・作詩メモ

暑い日が連日のように続いておりエアコンは欠かせないが、昔を慕うて
流金＝激しい暑さ
火雲＝夏雲
甑中＝こしきのなか　せいろうのなか

作詩日	平成二八年八月
平起式	
名前	松本祐輔

文　し　下　み　読

消夏戯（しょうかぎ）

夏深く金を流す　火雲の空
蒸暑方に　甑中に堕るが如し
庭上の緑樹　陰僅少
徒に団扇を揮って　風に負る翁

その他のメモ

名簿No. 15

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
晩秋公園	秋○	染●	昨●	行○
	深○	出●	夜●	人○
	菊●	全○	金○	止●
	発●	庭○	風○	歩●
	穏●	木●	招○	一●
（陽韻）	陽○	葉●	雨●	園○
	光◎	黄◎	水●	香◎

読み下し文
晩秋の公園
秋深く菊発いて陽光穏やかなり
染出だす全庭木葉黄なり
昨夜金風雨水を招く
行人歩を止一圓の香

作詩日　平成二十八年十月　日

平起式

名前　三浦　昭二

語註・典故・作詩メモ

私の会社の傍には横浜公園があり、朝夕の通勤や昼の散歩には、よく行き来する。公園には樹木が多く、先ごろまで青々としていたが、ふとみると、大分色づいていて彩を増してきている。朝方は雲り空で寒々としていたが、昼頃から陽も射してきて、修学旅行生や散歩を楽しむ人々が、公園内で、それらを背景に写真を撮ったりしていた。

その他のメモ